

れな病態と考えられ、また回腸囊炎の病態解明に役立つかもしれないため報告した。病変範囲確定にはダブルバルーン小腸内視鏡が有用であった。

4 当院における小腸疾患の診断と対応

相場 恒男・杉村 一仁・林 雅博
濱 勇・河久 順志・米山 靖
和栗 暢生・古川 浩一・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

【目的】小腸診療において、ビデオカプセル内視鏡（VCE）とバルーン内視鏡（BE）が、どのように使われ、使い分けられるべきか考察した。

【当院症例】当院でVCE 12例施行し、うちOGIBや貧血では10例行った。1例VCE飲めず中止、2例異常なし、1例腫瘍性病変を疑いBE施行、6例にびらん、潰瘍、telangiectasiaを認め、うち4例は保存的治療、2例に活動性出血が疑われBEを施行した。一方、BEは経肛門6例、経口3例行い、クローン病の消化管合併症診断が4例（3人）、出血病変の止血目的3例、腫瘍性病変の生検目的1例、VCE不適応1例だった。

【考察】VCEは簡便、安全、網羅性に優れており、OGIBに対し、VCE禁忌や不適応例以外は、まずVCEを行うことで診断が早まる可能性がある。さらに、生検や治療必要例は、その後BEを行うのが現実的であり、小腸疾患診断には両方のツールが必要と考えられた。

5 当院における小腸内視鏡検査の現状

河内 裕介*・横山 純二*・佐藤 祐一
小林 正明・成澤林太郎*・青柳 豊
新潟大学医歯学総合研究科消化器
内科学分野
新潟大学医歯学総合病院光学医療
診療部*

小腸はその解剖学的な理由から、今まで、アプローチの難しい臓器であった。近年、小腸バルーン内視鏡とカプセル内視鏡の登場により小腸疾患に対する診断と治療は大きな変化がもたらされている。当院では2007年よりシングルバルーン小腸内視鏡（Olympus SIFQ260以下SB）、2008年からカプセル内視鏡（Olympus EC-1以下CE）を導入し小腸疾患に対してアプローチを行ってきた。2009年11月現在SBは26症例49件施行しており、経口的が23例、経肛門的が26例で、合併症は認められていない。CEは35症例39件施行しており、全小腸観察率は79%で、滞留した症例は無かった。小腸出血の症例では診断アルゴリズムに従い、状況に応じてSBとCEを使い分けることで効率的に診断が可能であった。小腸バルーン内視鏡の登場は、今まで困難であった深部小腸における病変の診断や処置を可能とした。カプセル内視鏡は、現在原因不明の消化管出血のみが保険適用となっているが、今後は他の小腸疾患への適用拡大も期待されている。